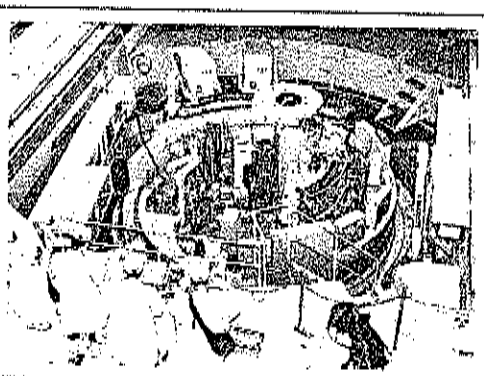
7/20 日経

高速炉「常陽」審査適合

規制委 原子力機構、25年再稼働へ

原子力規制委員会は二十六日、定例会合を開き、日本原子力研究開発機構の高速実験炉「常陽」（茨城県）の安全対策が新規制基準に適合しているとする「審査書」を決定した。常陽は審査合格となった。機構は二〇二五年三月の再稼働を目指しており、停滞している高速炉開発の拠点とするほか、放射性医薬品の原料製造にも使う。



高速実験炉「常陽」の原子炉格納容器内部＝6月、茨城県大洗町で

常陽では〇七年のトラブルで脱落した部品の一部が原子炉容器内に残っているとみられる。会合で伴信彦委員がこの問題を審査書で触れるべきだと指摘したことを受け、部品によるトラブル発生時の対応方針などを今後の検査で確認する。

山中伸介委員長は同日の記者会見で「ナトリウム火災などは相当慎重に審査を進めたため、時間がかかった。火災は常につきまとう重大な問題だ」と述べた。

一九七七年に運転を開始した常陽は、開発の次段階の高速増殖原型炉「もんじゅ」（敦賀市）が廃炉となった現在、国内唯一の高速炉。原子炉から熱を取り出す冷却材にナトリウムを使う。発電設備はない。〇七年から停止中で、機構は一七年三月に再稼働に向けて規制委に審査申請した。

政府が今年二月に決定した次世代炉開発の基本方針では、四〇年代に原型炉の次段階となる実証炉の運転開始を目指すとしている。